# 郷土の先達

（題字　山本卓眞元会長筆）

## 200

## 榎枝（えのえだ）　慶之輔（けいのすけ）

### ―タイガーと呼ばれた男―

日本発祥の武道である柔道と空手の競技人口をご存じだろうか？　日本国内では、柔道の十二万人に比して空手は三百万人、世界では、柔道が約百三十万人に対して空手は約一億人というから驚きである。この空手の国際化は、日本空手道協会（ＪＫＡ）が、若い優秀な指導者を〝空手大使〟として世界に派遣したからといわれている。その中に、その強さから「虎（タイガー）」と呼ばれた男がいた。榎枝慶之輔である。

慶之輔は一九三五（昭和十）年七月四日、父福男、母し乃の次男として直方市で出生。家は輸入医薬品の小売業を営んでいたが、戦時中に廃業し、農家になった。慶之輔は遠賀川のすぐそばの溝堀で育ち、小さい頃から〝やんちゃ〟であったという。

小学生になると直方警察署の二階にあった武道場に通い、柔道・剣道の稽古に励み、十七歳にして柔道二段を取得した。鞍手高校二年生のときである。

空手との運命的な出会いはその翌年だった。高校の先輩でもあり、後に拓殖大学空手道部の先輩となる、入江敏夫と岡崎照幸が帰郷した際、彼らが披露した演武にいたく感動。慶之輔は「柔道と剣道を一生懸命やっていたが、空手の演武を初めて見たとき、これこそ探し求めていた武道だと迷いもなく感じた」と述懐している。

空手との出会いの後、岡崎から拓殖大学への進学を勧める手紙を何度ももらい、慶之輔は空手の強豪として知られる同大学へ進学。昼夜を問わず空手漬けの生活を続け、空手道部の主将を務めた。卒業後は一旦社会人生活を経験したが、一九五九（昭和三十四）年、プロの空手家を目指す。四谷にある日本空手道協会（ＪＫＡ）の本部道場研修生となり、同協会設立者で初代首席師範の中山正道に師事。一九六一年、三年間の専攻研修を終えて本部指導員となる。

同年、全国空手道選手権大会の個人組手試合で三位、翌年は準優勝。翌々年の第七回大会で前年度覇者のライバル白井寛を降して優勝を果たす。歴史に残る名勝負といわれたその試合における、慶之輔の激しい組手スタイルに、師匠の中山は「虎（タイガー）」という異名を付けた。

終戦後、日本の柔道や空手などの武道に強い関心を向ける欧米人が増え、海外の軍部や特殊部隊、警察などから指導依頼がＪＫＡに殺到。日本政府からの要請もあり、ＪＫＡは若くてハイレベルな指導者を海外へ指導員として派遣することになる。一九六五（昭和四十）年、空手四天王といわれる白井寛、金澤弘和、加瀬泰治そして慶之輔を欧米その他の主要国へ派遣。最終的に白井はイタリア、金澤と慶之輔はイギリス、加瀬はフランスで長期にわたって指導することとなった。

イギリスでの慶之輔は、まずリバプールで道場を開き、一九六八（昭和四十三）年からはロンドンのマーシャル・ストリートに道場を開設。一九八一年にはイギリスに三百か所の道場と二万五千人の生徒を有する空手組織「ＫＵＢＧ」の最高師範となった。「センセイ・エノエダ」と慕われ、多くの著名人に空手を指導し、ＴＶコマーシャル出演や地下鉄ポスターのモデルになるなど、ヒーロー的存在でもあった。

私生活ではドイツで知り合って結婚した夫人との間に一男一女を授かる。世界各地に出かけて不在がちではあったが、家族を大切にする夫であった。しかし、タイガーと呼ばれた男も病魔には勝てず、二〇〇三（平成十五）年三月九日、鬼籍に入った。享年六十七。生前の功績をたたえ、ＪＫＡは彼を九段に認定した。

日本での葬儀に国内外から大勢の弔問客が訪れたことに加え、ロンドンのクリスタルパレスで行われた追悼式では入りきれない人が場外にあふれ、『タイムズ』に追悼記事が掲載された。しかし、なぜか日本では彼の功績を知る人は少ない。

一九六四（昭和三十九）年のオリンピック東京大会で柔道は正式種目となり、その後も各大会で採用され、日本人選手が活躍して多くのメダリストを輩出している。同じく日本発祥の武道である空手は、二〇二一（令和三）年開催の東京大会で、個人組手３階級と形を合わせて男女それぞれ４種目が、初めて正式種目となった。しかし二〇二四年、パリ大会では柔道とテコンドーはあるものの、空手は消えていた。世界で愛されている空手が、再びオリンピックの正式種目となることを切に願う。

参考資料　『タイガーと呼ばれた男～空手を世界に連れて行った榎枝慶之輔』（江本精　敬文舎）

写真提供　同書巻頭
リバプール、ネヴィルカイパース写真館撮影

執筆者　山上　勉（県人会理事・東京鞍陵会会長）